

参考文献

厚生労働省、「地域の自殺の基礎資料」

世界保健機関、訳 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 自殺予防総合対策センター、2014、『自殺を予防する 世界の優先課題』

【2】自殺について知ろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

◇社会学から見た若年自殺の背景（『若年者の自殺対策のあり方に関する報告書』より）◇◇◇
警察庁自殺統計によると、全国における年間自殺者数は、平成10年に3万人を超え、以来12年間連続で高止まりの状態が続いていました。しかし、平成22年からは徐々に減少を続け、平成29年（警察庁自殺統計暫定値）には21,302人となりました。一方で、若年層（30歳未満）の自殺者数は平成21年4,000人から平成28年2,736人の31.7%減少に留まっています。年齢層全体、30代、50~60代と比べると減少が小さくなっています。自殺死亡率の年次推移を見ても、横ばい、または微減となっています。また、厚生労働省人口動態統計によると、15歳~39歳までの死因順位第一位が自殺となっています。

今回は、『若年者の自殺対策のあり方に関する報告書』（2015）の中から浅野智彦氏の「社会学から見た若年自殺の背景」を一部抜粋し、若年者の自殺についてあらためて考えてみたいと思います。

自殺と幸福

—若年自殺が悪化した時期に若者全体の幸福度・生活満足度は上昇している。内面を視野に入れる必要がある。—

1990年代後半以降、フリーターやニート等の社会的問題に代表されるように、若者の雇用環境の劣化には著しいものがある。ところがこの間、若者の幸福感や生活満足度は上昇し続けているのである。内閣府の国民意識に関する世論調査によれば20代の生活満足度はかつてないほどの高さを示しており、またNHK放送文化研究所の中学生・高校生の生活と意識調査によれば、2002年から2012年にかけて「とても幸福だ」と感じる中高生が顕著に増加している。また自殺念慮についても、NHK文化研究所の中高生調査によれば、低下している様子が見られる。この謎については様々な解釈が試みられているが、いくつかのデータから推測されるのは、身近な人間関係の良好さが彼らの幸福の重要な源泉になっているということだ。

通常、自殺と幸福とはちょうど対極的な位置にあると考えられている（例えば、白石賢・白石小百合の幸福研究では、幸福度は主観的な評定において自殺（鬱状態）と対極にあるものと位置づけられている）。その観点からすれば、幸福度が上がっているのに自殺が増えるのは不思議だということになりそうだが（幸福のパラドクスに加えて、自殺のパラドクス）もしかすると幸福と自殺とは単純な対立関係にはないのかもしれない。実際、岡檀は自殺希少地域の幸福度がその他の地域に比べて高くないことを明らかにしている。希少地域で最も多い回答は中程度の幸福なのだという。また、黒川・大竹の研究によれば幸福度と満足度とは異なった条件によって上下し、世代効果・時代効果・年齢効果の組み合わせによって多様なパターンを示すのだという。これらは若年層の自殺と幸福との関係を考える上でも示唆を与える知見である。いずれにせよ、若年自殺を考える際に、自殺と幸福という対極的な現象の双方を視野に収めておく必要がある。

世代論的な要因に着目する研究

— 世代論的な要因に着目すると、1930年代生まれの自殺死亡率の高さには世代特有の価値意識が関与しているが、現在の若者の自殺に世代要因を想定することは難しい。また、現在の子どもの貧困は、将来的に自殺促進要因になる危険性がある。 —

戦後、若年層の自殺が深刻な悪化を見せた第一のピークについて（現在は第三のピーク）高原は、「彼ら1930年代生まれの人々は、その成長の過程で勤勉さと忍耐をよしとする価値観を身につけてきた。そのことが、彼らに弱音を吐くことを躊躇させ、社会生活における葛藤や挫折に対する柔軟な対応を難しくしている。そのような心性が彼らの自殺リスクを押し上げてきたのである」と述べている。このリスクは世代的なものであり、1990年代末以降には高年齢層の自殺数の増大となって現れたとも論じている。

実際、別の研究でもこの世代の価値観が変わりにくいものであったことが確認されている。すなわち坂口と柴田は、NHK放送文化研究所の「日本人の意識構造」調査のデータを用いて、この世代の価値観が時代ごとの社会状況や本人たちの加齢による変化を被りにくかったことを明らかにした。彼らが特に注目したのは、この世代の生活目標が、他の世代と比べて、「身近な人たちとの和やかな関係」に向かう傾向が低いという点だ。これは、彼らが弱音を吐けず、したがって、援助希求行動に消極的であることと関連していると推測される。

また、彼らの分析によれば、1930年代生まれの独特な価値観は、彼らの幼少期の貧しさによって形成された可能性が高いという。とすると現在、社会的に注目されている「子どもの貧困」も、将来的の自殺リスクに関わる要因であるかも知れない。

社会経済的な要因に着目する研究

— 社会経済的な要因として、失業率と経済格差が自殺死亡率を押し上げる度合いが日本では大きい。積極的労働市場政策は自殺死亡率を押し下げる。また、就活自殺の改善のためにはライフコースモデルの修正が必要である。 —

自殺が経済的な状況に左右されるものであることは多くの研究によって明らかにされてきた。中でも日本の自殺は、他のOECD諸国のそれに比較して経済的な要因に左右される度合いが大きい。とりわけ、失業と経済格差の二つは、自殺死亡率に顕著な影響を与えている。

失業の効果を明らかにしている研究の一つが森田次朗のものだ。森田は日本版GSS (JGSS) のデータを用いて、自殺念慮を規定する要因を検討した。その結果、20歳から59歳の男性の自殺念慮は、労働条件ではなく、失業の可能性を予見しているかどうかによって左右されることが確認された。

他方、公共政策と社会関係資本とのいずれかが自殺抑止に効果的であるということも確認されている。例えば、松林と上田は各都道府県の公的支出と自殺死亡率との関係を検討し、行政投資額・失業対策費が自殺死亡率と負の関係にあること（ただし後者は男性についてのみ）を示した。

若年層については「就活自殺」と呼ばれるものが目立つようになってきている。ライフリンクの調査によれば、「本気で死にたい」「消えたい」と思った学生は21%にのぼる。その背景には安定した「正職員」という進路がますます狭い道になりつつあるにもかかわらずそのような進路への固執が強まっているという事情がある。

これらは、高度成長期に確立したライフコースモデルの失調と、その失調をある程度補いつつ、別のモデルへと誘導する諸政策の問題と考えることができる。積極的労働市場政策などマクロな政策をもつ自殺抑止効果にこれまで以上に注目すべきであろう。

※紙面の都合上、一部改変・省略しています。

『若年者の自殺対策のあり方に関する報告書』(2015)の中から浅野智彦氏の「社会学から見た若年自殺の背景」を取り上げて、若年者の自殺について社会的な知見からの考察をまとめてみました。

自殺と幸福感は一見すると対立的な立ち位置にあるように思われるが、実際には直接的に対極するものではなく、むしろ自殺希少地域では他の地域と比べて幸福度は高くないというお話がありました。

世代論的な要因では、世代毎による価値観や心性はそのまま年を経ても変化しない場合があること、特に援助希求行動のとれない価値観や心性は自殺増加を促す要因となっているとのことでした。また、そうした価値観は貧困によっても形成される場合があるため、今後注意が必要とのことでした。

社会経済的な要因では、失業率・経済格差は自殺と密接に関係しているが、公共政策と社会関係資本によって抑止できるということ。若年者に関しては「就活自殺」という問題があり、それは若年者ならではの進路への固執がある、つまり高度経済成長に確立したライフコースモデルの変化が必要になって来ているというお話がありました。

今回はこの3点に注目しましたが、本誌の方ではこの他にも「身近な人間関係に着目する研究」、「自殺についての語り方に着目する研究」についても記載されています。興味のある方は御一読下さい。

参考文献

科学的根拠に基づく自殺予防総合対策推進コンソーシアム準備会 若年者の自殺対策のあり方に関するワーキンググループ、2015、『若年者の自殺対策のあり方に関する報告書』

【3】お知らせ.....

◇ 精神保健福祉センターでは、こころの電話相談を次の時間帯で行っています。

月曜から金曜日 9:00～21:00

土曜日曜祝日（12月29日～1月3日を除く） 10:00～16:00

Tel : 0570-064-556

※ご相談の電話が集中しますと、つながりづらい状態になりますがご了承ください。

◇ HP・携帯版HPをご覧ください

北海道地域自殺対策推進センターのHPを開設しています。最新の北海道の状況を掲載しており、より情報を見やすく、分かりやすくお伝えできるよう心がけています。

パソコンHP URL : <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/sfc/jisatutaisaku.htm>

また、携帯電話で見ることができる携帯版 HP も開設しています。警察庁および北海道警察から公表された統計資料をもとに、北海道における自殺の状況を掲載しています。こちらも併せてご覧ください。

携帯 HP URL : <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/sfc/i/joukyou.htm>

【4】編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

まだまだ寒さは厳しく雪解けも遠いですが、少しずつ日が長くなり、春が近づいてきているのを感じます。さて、先月から今月にかけて、少し目新しいニュースとして仮想通貨の乱高下がありました。それに伴い、アメリカのニュースサイトは自殺者増加を懸念し、自殺防止ホットラインを設置したようです。実際に、韓国では自殺者も出たと報道がありました。もう騒動は落ち着いてきているとは思いますが、日本においても注意が必要かも知れません。

3月は、自殺対策強化月間です。各種関係機関で自殺対策に関する講演や催し物が行われます。例年通りであれば、平成 29 年自殺者数の確定値が公表されるのもこのあたりになります。新しい情報が入り次第、逐次お伝えしていきたいと思えます。

いつもご愛読ありがとうございます。

次号 Vol.105 は、2018 年 3 月末に配信予定です。

お問い合わせ先

北海道立精神保健福祉センター
札幌市白石区本通 16 丁目北 6 番 34 号

Tel 011-864-7121

Fax 011-864-9546

URL <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/sfc/>

Mail hofuku.seishin1@pref.hokkaido.lg.jp